

フランス第三共和政初期におけるボナパルト派の思想と運動

—「右翼」としてのボナパルティズムと共和政—

湯浅 翔馬

本論文は、フランス第三共和政（1870～1940年）が成立し、確立へと向かう時期における、ボナパルト派という政治党派を考察したものである。帝政という君主政体を母体とする政治勢力であるボナパルト派は、フランス第三共和政期においては右翼に位置づけられる。しかし、フランスにおける帝政は、皇帝の権威のもとで「秩序」を維持する君主政であると同時に、フランス革命の最大の遺産である人民主権に基づいた普通選挙制を配する「デモクラシー」でもある。事実として、第二帝政（1852～1870年）は、フランスにおいて（男子）普通選挙制に基づく選挙が継続的に存在した、初めての政治体制だった。この点で、同じく「王朝／家系」を土台とする旧来の右翼勢力である王党派（正統王朝派、オルレアン派）に対して、帝政を支持する思想は、イデオロギーとしての「曖昧さ」や「両義性」を抱え、「左翼／右翼」の境界を超える広がり幅の大きさを、その特徴とする。さて、1954年のルネ・レモンの研究がその嚆矢となったフランス右翼史研究では、中期的、長期的な視点から、様々な政治勢力をつなぐ連続性が重視されていた。イデオロギーや心性、政治文化を重視する20世紀の政治史研究は、人物史や事件史といった枠組みでは不可能だった歴史叙述を可能にし、フランス右翼史研究の発展に寄与したことは、紛れも無い事実である。しかし、21世紀以降のフランス右翼史研究では、連続性ではなく、断絶や変化に力点が置かれている。フランス右翼に関する新たな研究動向が示すのは、個々の時代における社会的、政治的な文脈を重視しながら、右翼に位置付けられる「党派／政党」を個別具体的に検討することの重要性である。本論文が対象とする第三共和政初期という時代は、フランスにおける共和政の確立に伴い、「王朝／家系」を土台とした旧来の保守派右翼が衰退する一方で、ナショナリズムやキリスト教民主主義といった新たな右翼が台頭した時代に当たる。旧来の保守派右翼でありつつ、「デモクラシー」を政治制度の前提とするボナパルト派が、いかに共和政の確立に対峙したのか、そして彼らが衰退する過程で、どのように変化したのかを明らかにする本論文は、フランス右翼史研究の進展に寄与するも

のと考える。

ところで、第三共和政期のボナパルト派研究者の多くは、「名望家」に立脚した党派構造や、王党派と協力した選挙戦に見られる「保守性」を強調してきた。こうした「保守性」は、ボナパルト派の衰退と関連づけられ、批判的に解釈されてきたと言える。しかしながら、こうした研究の一方で、「保守性」を批判的に解釈するのではなく、どのような政治的文脈において、いかにしてボナパルト派は衰退したのかという視点から、「保守性」を再検討する必要性が、ボナパルティズム研究を専門としない歴史研究者から提起されている。後者の指摘を重視する本論文は、「保守性」をあくまでこの時期のボナパルト派の特徴のひとつとして捉えたうえで、政治思想あるいは政治運動としてのボナパルティズムが、共和政というもうひとつのデモクラシーに対峙するなかで、いかに変化したかを考察した。主な史料は、新聞メディアや小冊子などの刊行史料と、パリ警視庁文書館に所蔵されている、ボナパルト派の運動に関する報告書である。こうした史料は、議員のレベルや選挙の問題だけでなく、より広がりを持った思想・運動としてのボナパルティズムを解明することができる点で重要である。これら以外にも、フランス国立文書館所蔵のボナパルト家の個人文書や内務省警察関連文書などの文書館史料を使用している。また、第三共和政初期は、様々な政治党派が対立、妥協、協力をした時代であり、ボナパルト派と他党派との関係も重要となるために、共和派や王党派の史料も用いた。

本論文は、第1部「1870年代のボナパルティズムの多様性」、第2部「1880年代前半におけるボナパルティズムの展開」、第3部「ボナパルティズムとブーランジスム」の3部構成であり、各部はそれぞれ2章から成る。

第1部で扱った、1870年代という時期は、第二帝政が崩壊し、第三共和政が成立して間もない時期であり、1871年の国民議会総選挙で勝利した王党派が長く実権を握っていた。オルレアン派と穏健共和派の「妥協」によって成立した、1875年の「第三共和政憲法」は暫定的な性格が強く、当時の政体や政情は極めて不安定だった。パリ＝コミューンや、王政復古の接近、「5月16日事件」など、様々な事件に彩られるこの時期は、ボナパルト派が徐々に勢力を回復、拡大した時期でもある。実権を握る王党派と共和政の確立を目指す共和派の間で、ボナパルティストはどのような帝政の再建を掲げたのかという問いを、ジュール・アミーグとポール・ド・カサニャックという二人のボナパルティストの帝政再建論から検討した。彼らの帝政観を考察するうえで、主に分析した点は、第二帝政の自由化に対する認識、他政体（王政、共和政）に対する帝政の位置づけ、フランス革命がもたらし

た「デモクラシー」の捉え方である。

「第1章：1870年代の「左翼的」ボナパルティスム —ジュール・アミーグの帝政」で分析したのは、ボナパルト派左派に位置づけられ、「共和主義的」「社会主義的」ボナパルティストとされるジュール・アミーグの帝政再建論である。第二帝政末期、アミーグは「共和派」を名乗っていたが、「現実的な」デモクラシーとして帝政を捉え、その自由化を支持するアミーグの姿勢にはすでに、第三共和政期に帝政支持へと至る要素が見られた。第三共和政初期に展開されたアミーグの帝政再建論の特徴のひとつは、デモクラシーの観点から帝政を理解することにある。帝政支持者として、王党派に対しても共和派に対しても批判を加える一方で、共和政を「普通選挙と国民の承認に基づく政治体制」と定義するアミーグは、帝政は「共和政の一形態」とであると主張した。また彼の選挙制度改革論における「命令的委任」の存在のように、アミーグの主張には「左翼的」性格が顕著に見られる。しかし、アミーグの思想的な特徴は、その左翼的要素が帝政の再建と結びついていた点にある。そして、この特徴には、第二帝政期の社会政策をアミーグが積極的に評価したことが密接に関わっていた。第二帝政期の社会政策によって労働者の境遇改善がなされたが、それは社会問題に関心を抱く皇帝の存在を通じて実現したと主張するアミーグにおいて、帝政は、フランス革命によってもたらされたデモクラシーを発展させる政治体制として捉えられていた。

「第2章：1870年代の「保守的」ボナパルティスム —ポール・ド・カサニャックの帝政」で検討したのは、ボナパルト派右派に位置づけられるポール・ド・カサニャックの帝政再建論である。保守的ボナパルティストであるカサニャックは、デモクラシーに否定的なボナパルト派の代表として扱われてきた。確かにカサニャックは王党派との協力による共和派への対抗を主張した。しかし、第二帝政末期における彼の反自由化の論理に見られるように、カサニャックは1852年体制こそが帝政のあるべき姿だと捉えていた点が、彼の帝政再建論を理解するうえで最も重要な要素となる。カサニャックは、人民主権に基づく普通選挙制を帝政の前提としながらも、真の「人民」とは都市部の「革命的な」労働者ではなく、穏健で保守的な農村部の住民であると主張する。そして、革命によってもたらされたデモクラシーの時代の不可逆性を認めつつも、都市部で革命や暴動が繰り返されるフランスにおいては、デモクラシーを制御する必要があるとカサニャックは認識していた。このような考えを持つカサニャックが重視したのが、人民投票を媒介とすることで、「秩序」を守るために必要な「権威」を獲得した皇帝という君主の存在である。そして、1852年体

制こそが、不安定なデモクラシーにおいて、秩序を維持できる体制であると捉えるカサニャックは、第二帝政の自由化の記憶と、それへの批判精神から「帝政主義」という理論を打ち出した。帝政（=1852年体制）とは、ボナパルト家の人物によるものでなくても存在しうるとするこの理論により、カサニャックは帝政という政治体制をボナパルト家から独立させる。これ以降、彼はボナパルティストではなく、帝政主義者を名乗るようになるが、この理論は1880年代以降のボナパルト派の展開にも影響を及ぼすことになる。

第1部のまとめとして、1870年代における、帝政を支持する思想としてのボナパルティズムの多様性を明らかにするために、アミーグとカサニャックのボナパルティズムの比較を行った。「再建すべき帝政」とはいかなるものかという点で、この時期のボナパルティズムには多様性が見られる。アミーグとカサニャックはともに、(男子)普通選挙制に立脚する帝政を、人民主権に基づく革命後のデモクラシーの政体として認識し、統治機構における皇帝という存在のイニシアティブを重視する。しかし、第二帝政期の自由化に対する姿勢も、第三共和政期に入って再建すべき帝政を唱える際に参照した時期も、帝政の基盤たる人民の想定も異なる。アミーグにとって帝政とは、労働者の境遇改善を推し進めることで、未完のデモクラシーを「発展」させる政体だったのに対して、カサニャックにとって帝政とは、常に都市部の労働者によって揺さぶられる不安定なデモクラシーを「制御」する政体だった。しかし、政権を握る王党派とそれに対抗する共和派の間で、ボナパルト派が勢力を拡大していた頃の両者の主張に通底しているのは、王政にも共和政にもない独自の価値を帝政は有しているのであり、それゆえに再建すべきであるという論理であった。第三共和政が成立して間もないこの時期において、思想としてのボナパルティズムは多様な性格を帯びながらも、明白に帝政という政体の再建に結び付けられていた。まさにその意味で「帝政を求める思想」として、フランス右翼のなかで独自性を有していたと言える。

第2部で検討したのは、1880年代前半におけるボナパルト派の思想と運動である。1880年代に入って、時代は共和派の優位へと移り変わった。1876年、1877年の下院総選挙で共和派が勝利し、1879年には上院の多数派、大統領職を共和派が手中に収めた。そして同年6月、若き皇太子が不慮の死を遂げる。この死は、皇帝の直系の断絶と、それによる皇位継承問題を招いた。帝政憲法に規定された共和派ナポレオン公ジェロームの皇位継承の正統性の一方で、皇太子が遺言に記したヴィクトル公の継承権への移譲は、ボナパルト派内部に、ヴィクトル派とジェローム派の「分裂」という深刻な影響をもたらした。こうした状況に置かれたボナパルト派を分析するうえで重視したポイントは、保守派に対して優位

に立った共和派が、共和政を確立しようとするなかで、ボナパルト派はいかにこれに対応したのか、そしてその過程でボナパルティズムはいかに変化したのかという点である。

「第3章：ヴィクトル派の形成と展開」では、ヴィクトル派（＝帝政派）という集団の思想と運動を検討した。これまでボナパルト派右派の結集として捉えられてきたヴィクトル派の形成であるが、アミーグとカサニャックの主導という事実と、「制度」として再建すべき帝政という両者に共通する論理を踏まえれば、帝政再建という目的に対する「非妥協性」という様相も帯びていた。1882年にヴィクトル派は組織を拡大していくが、しかし、1883年4月のアミーグの死以降、カサニャックの影響力が拡大していった。共和政が確立されようとしている一方で、保守派は衰退している状況において、慎重な姿勢を崩さないヴィクトル公を前にして、1884年にカサニャックは、デモクラシーの時代における君主政として、帝政と王政は同一であるという理論を打ち出した。君主政を再建し、共和政を打倒するならば、王政でも帝政でも構わないとするこの理論は「ソリューションニスム」と呼ばれる。カサニャックは、これに基づき、帝政派を王党派との同盟路線へと導いていく。こうしたカサニャックの「保守派化」路線は、帝政再建というボナパルト派本来の目的から離れるものであると同時に、共和派への対抗という意味では、1885年の下院選挙における保守派の議席拡大につながるものでもあった。

「第4章：1880年代前半におけるジェローム派の思想と運動」で扱ったのは、共和政を認めるナポレオン公ジェロームの継承を支持した人々の思想と運動である。ヴィクトル派とは異なり、ジェローム派は主にボナパルト派左派から成る。ナポレオン1世とナポレオン3世こそが、フランスにおけるデモクラシーの発展をもたらした存在であると捉えたジェローム派は、王党派との同盟を否定し、共和政に共感を寄せた。直接民主政の導入や社会改革などに象徴される「ナポレオンの観念」は、共和政と矛盾するものではないとジェローム派は主張する。しかし、彼らは現状の共和政が有する「議会主義的」性格を批判し、より「民主的」な共和政への改革を求めた。この点で、急進共和派的な色合いを帯びる彼らのプロパガンダは、共和政への「ナポレオンの統治」の導入、すなわち人民による大統領の直接選出へと収斂される。しかし、ヴィクトル派とは異なり、ジェローム派の運動は組織化されず、資金難にも苦しんだ。さらに、急進共和主義的な立場を取りながらも、選挙戦で同盟を組み得る相手がいないジェローム派は衰退を余儀なくされる。その過程で、選挙での敗退を危ぶんだ者や、自由主義的な立場をとる者は、ジェローム派の運動から離脱することを選んだ。

この時期のボナパルト派は、皇太子という最後の希望を失い、党派内部に分裂を抱える一方で、着実にフランスに根を張ろうとする共和政に対峙した。1880年代前半のボナパルティストたちの思想や運動からは、帝政という体制や「ナポレオン」という存在を解釈し直していく様が看取される。1870年代には、フランスに再建すべき政体として存在していた帝政は、カサニャックにおいては王政へ、ジェローム派においては共和政へと結びつけられていく。1880年代前半には、思想・運動としてのボナパルティズムから、「帝政再建」という根本的な要素の解体が始まっていたと言える。右翼としてボナパルティズムを見るならば、この時期のヴィクトル派は、帝政再建を目指す「非妥協的」な姿勢においても、王党派と協力する「保守派」的な姿勢においても、右翼の性格を明確に有している。一方で、ジェローム派を図式的に右翼に分類することはいささか難しい。ジェローム派は、フランス革命の最大の遺産たるデモクラシーはまだ未完であると捉え、共和政の「民主化」を求めるという「左翼的」立場をとった。ジェローム派が右翼と言えるのは、フランスにおける「デモクラシー」の発展や、共和政を民主化するために必要とされる改革が、「ナポレオン」という存在を通じて捉えられたために、彼らがボナパルト派に属していたという点である。ボナパルト派全体から見た場合、ジェローム派の存在は、左右に広がる思想的な多様性という点で、同じく「王朝／家系」を土台とする右翼である王党派に対する、ボナパルト派の独自性を示すものと思われる。

第3部では、1880年代後半のボナパルト派の思想と運動を分析した。その中心となるのは、この時期にフランスを席卷したブーランジェ事件へのボナパルト派の対応である。政治手法やイデオロギーの観点から、ブーランジスムとボナパルティズムには共通性があるとしばしば指摘されてきた。またブーランジェ事件は、世紀転換期に起きたドレフェス事件を通じて本格的に拡大するナショナリストという新たな右翼の台頭をもたらすと同時に、1890年代初頭における王党派(カトリック勢力)による共和政への同意運動(＝ラリマン)の背景を形作った。この点で、フランス右翼史の画期とされるブーランジスムに対して、ボナパルティズムがいかなる関係を取り結んだのか、そしてボナパルティズムはブーランジスムにどのような影響を受けたかを、ヴィクトル派およびジェローム派によるプロパガンダに見られる思想と、実際に展開された政治運動の両面から実証的に考察した。

「第5章：ヴィクトル派とブーランジェ事件」では、1880年代後半から1890年代初頭におけるヴィクトル派の思想と運動を分析した。ブーランジスムの高揚前夜のヴィクトル派内部では、ポール・ド・カサニャックが展開した王党派との協力路線(右翼連合)に対

して、ジェローム派から離脱し、ヴィクトル派に合流したロベール・ミシェルをはじめとするヴィクトル派左派による反対運動が生じていた。「帝政」や「デモクラシー」のあるべき姿をめぐる明確に異なる思想を持つカサニャックとミシエルの対立は、ヴィクトル派組織に影響を及ぼし、セーヌ県ではそれぞれの支持者間の対立へと拡大した。ヴィクトル公は、この内部対立の解決を図ったものの、それは完全に解消されぬまま、ヴィクトル派はブーランジスムの高揚に対応することになる。その結果、保守派としてブーランジェを支持するカサニャック、急進共和派のブーランジストに近づくミシエルという差異は、それぞれの支持者にも波及した。ヴィクトル公や中央コミテの指導者は、王党派とブーランジェ派の間で、帝政派の自立性を保とうとしたものの、結局はブーランジスムの波に抗えず、ヴィクトル派は帝政再建という目標を棚上げにして、ブーランジスムとの協力へと舵を切った。しかし、その運動には統一された見解や方針は存在せず、ブーランジスムをめぐるヴィクトル派の運動はまとまりを欠いており、個人や個々の下部組織で様々な運動が展開されることになった。

「第6章：ジェローム派とブーランジェ事件」では、ヴィクトル派よりも、密接にブーランジスムに加担、合流したジェローム派とブーランジスムの関係を考察した。ブーランジスム前夜のエルネスト・パスカルの改憲論では、執行権と立法権の明確な分離を共和政内で確立するという点に力点が置かれていた。独裁と同時に議会主義からも免れた体制として、アメリカ型の権力分立の共和政を唱えるというパスカルの立場には、急進共和派のちにブーランジェ派の中心人物のひとりとなるナケとの類似性が指摘できる。その思想における「共和主義化」が進む一方で、運動の組織化も遅れ、プロパガンダを行うためのメディア媒体も少なかったジェローム派は、急進共和派のブーランジスムに、「議会共和政」の改革という主張が実現する機会を見出し、積極的に参加した。ジェローム派による急進共和派ブーランジストへの接近は、「ナポレオンの観念」とは共和政というデモクラシーを強固にするための原理である、という解釈を通じてなされたが、それは同時に、ナポレオンが併せ持つ「君主」や「独裁」という性格や帝政という政治体制とは、完全に袂を分かつことを意味するものだった。しかしながら、ラングレの選挙運動の分析から明らかになったのは、共和主義が根付いたパリの有権者の間には、「ボナパルティスト」という立場への懐疑や不満が根深く存在していたということである。

ボナパルティスムとブーランジスムの関係は、ヴィクトル派という当時のボナパルト派内で多数派を占めた集団から見た場合、相互の密接な関係や影響を生み出すものではなか

った。またジェローム派から見た場合も、彼らのボナパルティストという立場は、共和政の改憲運動のなかでは、一種の足かせとなるものだった。ヴィクトル派左派であれ、ジェローム派であれ、ボナパルト派左派がブーランジスムに積極的に参与する場合には、彼らが共和政を一時的にでも受け入れることが必要とされたことを踏まえれば、ボナパルティスムとブーランジスム(あるいはそれが端緒となったナショナリズム)の間の相互関係は、後者の共和主義的性格を考慮に入れなくてはならない。

ブーランジェ事件を経て、ボナパルト派はほとんど影響力を持たない程度の勢力へと衰退した。ブーランジスムの後、1891年のナポレオン公の死により、ボナパルト派の内部分裂は終焉を迎えた。1890年代初頭、ボナパルト派は、帝政から「人民投票」へとその旗印を変える。そして、これまでのように王党派と手を結ぶのではなく、左翼を取り込もうとするなど新たな運動を模索していく。しかし、その一方で、ボナパルト派左派においては、共和政への「同意」が進展していった。ブーランジェ事件をめぐるボナパルト派の思想と運動、そしてその後の彼らの展開を踏まえれば、ボナパルト派にとって、ブーランジスムへの参加と失敗は、1880年代を通じて展開されていた、帝政を支持する思想・運動としてのボナパルティスムの解体を加速させるものだったと言える。

「結論」では、各部での論点をまとめたうえで、第三共和政初期におけるボナパルト派に関する先行研究の見直しを行うとともに、フランス右翼史における第三共和政期のボナパルティスムの位置付けを考察した。確かにボナパルト派は党派構造の面でも、王党派と常に手を組んだ選挙戦においても「保守性」を抱えていたが、本論文で明らかになったのは、1870年代から1880年代にかけて、ボナパルト派の勢力が回復、拡大し、そして衰退していくなかにおいて、思想としてのボナパルティスムは、常に多様性を抱えていたということである。政体が不安定だった1870年代だけでなく、1880年代においても、ボナパルト派は思想的に均一な集団ではなく、ボナパルティストは様々な運動を模索していた。そして、帝政と共和政の関係を絶えず議論し続けてきたボナパルト派左派の存在を無視して、1890年代にボナパルト派が、帝政から人民投票へと旗印を変え、左翼や共和派を取り込もうとした変化は理解できない。

この時期のボナパルティスムの特徴は、ボナパルト派の政治思想・政治運動の前提となっていたはずの帝政という政体の枠組みが、ボナパルティスト自身によって、解体されていくことにある。そしてこの現象は、ボナパルト派右派から左派まで様々な立場のボナパルティストに見られた。共和政というもうひとつのフランスにおけるデモクラシーの体制



の確立と対峙するなかで、イデオロギーとしての「曖昧さ」や「両義性」に基づく思想的な多様性という特徴を有しているがゆえに、「帝政」という政体の役割や「ナポレオン」という存在が、「近代的な君主政としての王政」や「人民投票型の共和政」を支持する原理へと変換されていく過程は、フランス右翼史における、この時期のボナパルティズムの独自性を表していると思われる。本論文を通じて、ボナパルティズムという「王朝／家系」を土台とする旧来の右翼勢力のひとつに位置づけられる政治党派の独自性と、その衰退の過程で生じた変容を実証的に解明できたと考える。